

『五百重波』とその歌人

『五百重波』は、本間游清編の歌集で、文政二年（一八一九）、もしくはそれ以後間もなくの板行であろう。游清らの歌五百首余りを収録したところからの命名である。編集、刊行の経緯は「叙」に詳しい。その「叙」冒頭の「つかへまゐらず女君」は、伊予吉田藩主村芳夫人満喜子で、游清は江戸詰の藩医として仕え、満喜子の和歌の師をも勤めていたのである。満喜子には歌集『袖の香』一卷がある。游清の人の柄や業績については、先に『みくと川』上下二冊（愛媛大学文学叢書56）を刊行した際、その末尾に添えた山本信哉氏の講演記録「誤られたる本間游清」を参照されたい。游清の歌は還暦祝賀歌集『もとかしは』のほかにも、多くの歌が残っている。

『五百重波』に名を連ねた歌人は、巻末に「作者三十五人姓名」があり、游清とその周辺の人たちである。游清からすれば「友とちの歌」人たちであり、主として春海門という関係にある。『みくと川』には上巻六一・一六一・一七八・一八一・一八三、下巻五・一五・三四・四三・六六・九三・九六・一二一・一二六・二二二の各頁に同じ人々の歌が収められている。また、清溪・正臣上六七、下一五六、光彪上六八、擁書楼・与清上一五〇・下一八八・二二二・二三四、躬絃下一〇五、の記事がある。

次に『近世人名録集成』『国学者伝記集成』『国書人名辞典』第一巻等手元にある資料で分かる範囲で簡単にその経歴を記しておく。資料名は初出以後略称する。

○清水濱臣 濱臣、藤原氏、泊々舎ト号ス、玄長ト称ス、江戸ノ人ナリ、春海ニ学テ教授シテ業トス、殊ニ博洽ヲ以テ称セラル、文政七年（一八二四）閏八月十七日歿ス、歳四十九、コノ人モシテ長フセハ斯道ニ功有リ、勝テ数フヘカラス、惜哉、著述、杉田ノ日記、月詔ノ和歌集標注、荷田東満哥合、源氏名寄図考、泊々筆話、濱臣家集、コノ外校正シテ上木スル者ハ数種アレトモ自著ニアラサレハコレヲ省ク（統諸家人物

志）〔国学者伝記集成〕〔松屋叢話〕参照。

○堂勢子 村田多勢、多勢子ト称ス、春海ノ女（養女）ナリ、家翁ニ学テ和哥ヲヨクス、コレヲ以テ教授シ業トス、和哥集ヲアラハス（統諸家人物志）八丁堀地藏橋に住む。（諸家人名録）『篠舎漫筆』に尼になりたる多勢子を訪う記事あり。

○光彪 豊前小倉ノ藩士、京邸ノ留主居ヲ勉ム、通称莊（庄）兵衛、春海門ニ入テ詠哥ヲ修シ、古学ヲ研究ス、家集アリ、世ニ流布ス（古今墨跡鑒定便覧）梨園・福堂と号す。天保三年（一八三二）二月六日没。五十八歳。

○立綱（リュウコウ） 大寂庵、江戸（鯉玉集）立綱は大寂庵と号す、近江の人にして江戸に住す、僧海量の門に入りて学ぶ、頗る博学なり〔集成〕旅の僧で、深川の草庵で没した。文政七年（一八二四）四月一日、六十二歳。随筆『萃の跡』あり。（森銚三著作集二）

○定時 江戸（鯉玉集・国学人物志）

○躬絃（ミツル） 江戸ノ人ナリ、医ヲ以テ業トス、千蔭春海ノ輩ト交リテ古学ヲ修ス、初メ加茂季鷹翁ノ門ニ入テ詠哥ヲ研究ス、後一家ヲナシテ其名大イニ震フ、既ニ万葉集略解作者ノ一人ナリ（古今墨跡）姓は源、安田氏、通称一庵、江戸人、医ヲ業トス、初メ和哥ヲ季鷹ニ学ヒ、後国学共ニ大ニ進ミ、一家ヲナス（本朝古今新增書画便覧）号桑本（ナツメガモト）、称一庵、文化十三年正月五日（没）寺丁慧然寺（江都諸名家墓所一覽）〔集成〕

○千幹 江戸ノ人、初清原雄風ニ從ヒテ学シニ、雄風ノ曰、汝ノ才氣我門ニ在ニアラス、橘千蔭ヲ以テ師トスヘシト、爰ニ其意ニ從ヒ千蔭ノ門ニ入テ修学シ、終ニ一家ヲナス（古今墨跡）国学、千幹、一号曼庵、字長秀、横山同朋町正木千幹（江戸当世人名録）

白方 越智 文勝
(国文学研究室)

著述は〔集成〕

○寛光 江戸ノ人ナリ、通称周助、藤原氏、類ニ修学シ、終ニ一家ヲナシ、門ニ入テ教ヲ受ルノ徒多シ(古今墨跡) 国学、寛光、一号郁子園(ムベゾ)、字桂満(カツラマロ)、又葛垣内(ツタノカキツ)、江戸人、神田松永町大通裏手(江戸当時諸家人名録) 江戸佐久間町の里正にて、天保九年(一八三八)正月十五日歿。(名人忌辰録) 織錦翁の晩年の門人なり。いみじき歌人にて、年はやうやく三十にふたつみつこえぬれど、其よめる長歌短歌、一万首に余れるが、とりぐに幽玄ならざるはなし(擁書漫筆・三の八) 著述等は〔集成〕

○田鶴子 江戸、廣岡登妻(国学人物志)

○長英 江戸、遠江人(国学人物志) 遠江掛川駅、住江戸(鯉玉集)

○真澄 国学 月樓、名真澄、字隣、称美毛比磨、会日三八、葛飾小梅村(当時現在広益諸家人名録) 橘千蔭ニ従ヒ、歌ヨミ、モノ書コトヲマナバレ、手跡モ歌モ世ニユルサレン人ナリ(古学小伝) 歌集に『玉藻集』『青藍集』あり。天保九年(一八三八)二月十九日没。「見ぬ世の友」参照。著述は〔集成〕〔国書〕

○安寛 (なし)

○正毅 字伯率、通称皖太郎、号龍泉、(森統三12)

○務廉(ナガカド) 聞人国学、竹庵、本銀町一丁目(諸家人名録) 春海門、和歌を能くし、筆蹟に巧なり。文政二年(一八一九)没。四十六歳。〔集成〕御豆屋務廉、『五山堂詩話』に漢詩を載せる。(森統三7)

○千引 江戸ノ人也、千蔭門ニシテ修学シ、類ニ其風ヲ唱フ、徒ヲ延テ教示ス(古今墨跡鑒定便覧) 江戸ノ人、和学並ニ哥ヲ以称セラル、学ハ物語フミニクハシク有職ニ通ス、哥ハ千蔭翁ニマナヒテ都下ニ名アリ(書画薈粹) 字道和、通称純蔵・伝兵衛・源太左衛門、号星廬・草々舎・野々舎、天保五年(一八三四)没、六十五歳。「古学小伝」に詳し。著述等は〔集成〕〔国書〕

○正臣 名ハ正臣、字ハ欽若、清溪ト号ス、京ノ人、家世大炊御門藤公ニ仕フ、従四位下ニ叙シ、近江守ニ任ス、少年ヨリ国学ニ志シ、歴代ノ制度ニ精シ、又和哥ヲヨクス、晩年江戸ニ遊テ、文政六年九月十四日ヲ以テ客旅中ニ卒ス、歳七十(統諸家人物志) 山本清溪は大炊御門の諸大夫にて、衣紋の事に委し、家をば子に譲りて退隠し、江戸に來り、歌をもて業とす。江戸に來りしは当年をさる事二十年前也(みくと川) 子が実父は橋本大和守といひて、予は同僚の山本氏ハ養子となりたる也(みくと川) 『清溪遺稿』『清溪集』その他〔集成〕〔松屋叢話〕

○定良 木村俊蔵。江戸ノ人ナリ、千蔭春海ノ輩ト交リテ修シ、大イニ進シテ徒ヲ教示ス、草野集ヲ著ハシテ世ニ益アリ(古今墨跡鑒定便覧) 檀園と号し、本郷森川宿に住

む。通称駿蔵、字駿卿、幕府御先手与力を勤む。和歌に堪能。弘化三年(一八四六)没。〔集成〕

○幹之 杉本善兵衛、江戸(国学人物志)

○定治 森定治 江戸(国学人物志・鯉玉集)

○彦磨 斎藤可怡 国学、彦麻呂、号章之仮庵、浜田侯藩、築地、斎藤嘉齡(江戸当時諸家人名録) 通称庄九郎、小太郎、彦六郎、号宮川舎、安政六年(一八五九)三月十二日没年譜、著述は〔集成〕本居宣長が門人にて、学の道にすぐれ歌に文に世にいられたり(擁書漫筆三の廿一)

○与清 国学、松屋、名与清、字文儒、神田通船屋敷、高田正次郎(諸家人名録) 号知非斎、会日四八、神田花房町、小山田将曹(広益諸家人名録) 江戸ノ人也、初通称高田正次郎、後小山田将曹ト改ム、字文儒、類リニ古学ヲ研究シテ大イニ世ニ鳴ル、家ニ数万卷ノ書ヲ蔵シテ博覽多通ナリ、著書多シ、号ヲ擁書倉ト云、弘化四年(一八四七)三月廿五日歿ス、年六十五(古今墨跡鑒定便覧) 著述等は『擁書漫筆』ほか多数〔集成〕

○千枝子 『松屋叢話』に千枝子のうたを春海が褒めた話がある。

○由豆流 国学、恠園(ヤマブキ)、名由豆流、字大隅、又号尚古考證園、銀街一丁目、岸本讀岐(諸家人名録) 岸本弓絃、平氏、江戸ノ人、通称大隅恠園ト号ス、博学淹通ニシテ、著述ヲ専門トス、世ニ益有ル甚多シ、詠歌又精巧タリ、名声籍甚シ、弘化三年(一八四六)五月十七日歿ス、年五十八、江戸林泉院ニ葬ムル(古今墨跡鑒定便覧) 春海晩年の門人。著述等は〔集成〕〔擁書漫筆二の廿四〕

○美雅 小島半七(国学人物志)

○千閑 江戸、一柳千古(国学人物志) 国学、豫山、名千古、字萬、又号章堂、一柳千古(諸家人名録) 江戸八町堀ニ住ス、字萬、豫山ト号ス、又章堂ト云、千蔭門ニシテ最モ詠歌ヲヨクシ、又文章を以テ專ラトス、文政年歿ス(古今墨跡鑒定便覧)〔集成〕

○正路 江戸(国学人物志)

○長亭 江戸(国学人物志)

○定保 江戸(国学人物志・鯉玉集)

○景寛 江戸ノ人、通称仁左衛門、歌学ヲ以テ専門トシテ時ニ称ス(古今墨跡)〔集成〕 軍太と称した(森統三7)

○貞仲 江戸(国学人物志)

○承 江戸(国学人物志)

○八穂 江戸ノ人ナリ、通称伊十郎、千蔭春海ノ諸友ト交リテ、頻リニ唱フ、従ヒ学フモノ多シ(古今墨跡) 著述は〔集成〕

○野洲良(ヤスラ) 関岡安良、江戸ノ人也、通称長右エ門、歌学ヲ以テ時ニ賞譽ス(古今墨跡) 国学、名安良、号関亭、又花月斎、江戸ノ人、国学ヲコノンテ名アリ、富沢町、関岡長門(書画齋粹) 歌・地理学に詳しい(古学) 天保三年(一八三二) 十一月二十五日没。六十一歳。著述等は(集成)

○芳香 江戸ノ人、初春郷(春海兄)ニ学ヒ後春海ニ就テ修学ス(古今墨跡) 薩摩侯家臣(森統三七)

○游清 和歌、遊清、名遊清、号九江、吉田藩、南八丁堀(広益諸家人名録) 学医歌学、九江、名游清、字士龍、一号眠雲、会日二ノ日(同)よみ歌の外に過れし韵学はしる人ぞしる是ぞたふとし、大極上々吉千年、(肖像)南八丁堀(江戸文人寿命附) 江戸ニ住ス、伊予吉田侯ノ藩医、歌学ヲ修シテ、時ニ称セララル、弘化中歿ス(古今墨跡) 嘉永三年八月十六日没、七十四歳。「集成」は本間百里と混同。

以下の翻刻は、大阪府立図書館蔵本を用い、越智が原稿を作成し、白方が校正した。翻刻を許可くださった大阪府立図書館には厚く御礼申し上げます。異体字・特殊な漢字は現行の漢字に改めた。なお紙数の都合で、歌題・歌・作者名の順で一行とした。

『五百重波』

五百重波叙
つかへまゐらす女君、和歌をこのませ給ふことよなくおはしましけり。花ほととぎす月雪のりをはさら也、雨そほふる夕まくれ霧立みたる、朝ほらけにもおんまへ近くめして、みつつからも口すさび、おのれにもよましめ給ふこと十歳になむ餘れりける。年あらたまりてははやく六歳はかりや過ぬらむ、濱臣ぬし堂勢子とし光彪ぬしたちのはしかきをそへておのか歌一卷を書て奉りしことありき。今年はおのか歌に友とちの歌をくはへて書て奉れ、かくこもりてのみ月日を過す身に世中の有さまをも見、かつはみやひ人たちの心々をもしらはやおほせ言有けり。そもくおのか心しりの人々世におほしといへとも、よめる歌をはさのみおほくも書とめねは、いかせましととさまかうさまおもひたゆたひしかとも、まめなるおほせ言のかしこさに、あなかつにもえいなみ奉りかたくて、年ころ耳の底に聞たもちたる限りをおろくしるし集めて御らんせさせたれば、いといたう喜はせ給ひて、おなしくは板にありて奉れ、近くさふらふ女とちにも賜はせむとするに、筆より筆にうつさむには誤もいとおほかるべく、はたいたつかはしきわさそかしとねもころにかさねておほせたりひければ、やかに耕文堂のあるしにあつらへてかく桜木には句はせたるになむ。もとより歌のよしあ

『五百重波』とその歌人

しえりととのへむ身にもあらず。たゝ有かまゝをものしつれば、歌ぬしの心によしと思はれしももれ、あしと思はるゝも入たるへし。また歌数の多きあり、少きあり、是はたことさらにこひ求めさるか故なれば、みたまはむ人たちしとけなきおのかしわさをなとかめ給ひそも
文政二年きさらき十日はかり

眠雲舎のあるし本間游清 するす

五百重波一卷 春部
立 春 さらてたにのとけき春を君か代のたひらの宮にむかへつるかな 濱 臣
馴れにける歳の別ををしむまにうひくしくも来たる春かな 堂 勢 子
なやらふと身にとりそへし太刀の緒もまた解あへず春は来にけり 光 彪
元日立春 先たゝすおくれず春のそひ来れはむつまし月といふにや有らむ 游 清
處々立春 花鳥のおのつからなる曆にや野守山守春をしるらむ 濱 臣
春立けるあした あたらしき春にとはれて門の戸を明れはやかてさす日影かな 立 綱
はるのはしめに 何となくいふ言の葉も春めくはこゝろのたねや花もよひする 濱 臣
早春山 むさし野の若なつむ日はちふふねのを嶺そ遠く霞そめたる 躬 絃
をりくはまたしら雪もふる衣きならの山の春のこのころ 游 清
早春水 春立て氷ながるゝ水のうへにまつゆくものはこゝろ也けり 定 時
瀧音知春 山姫の衣の瀧のおとすなりたもとゆたかに春やたつらむ 堂 世 子
春色浮水 雪もきえ氷も今朝は流れ江の波まにかすむ春の山の端 千 幹
賭 弓 大庭に驚と鷹とのかたわけてみことまつ也いてのもろ人 光 彪
白馬節会 はたちあまりひとつの馬も引過ぬ今やみかとにみき賜ふらん 寛 光
子 日 ふる草にひ草まじる野へにいてゝ老も若きもひく小松かな 濱 臣
はつ春の初子の小松ひきにとてやかてよはひをのへに来にけり 定 時
山中春望 山分てかすむをのへの瀧みれば画にも声ある心地こそすれ 千 幹
海辺霞 いさりする蟹ならなくにさほ姫の霞の袖のしほなるゝ哉 堂 世 子
野外朝霞 朝なつむうなぬのかたみめもはるに霞たなひくむさしのゝ原 田 鶴 子
舊巢鶯 世中の花にこゝろやちらさらむ雪のふる巢に籠るうくひす 濱 臣
朝聞鶯 あらゝかに朝戸なあげそらくひすのかたらひなるゝはしめ也けり 光 彪
鶯 かゝは袂にしめつうくひすの声の匂ひよいかにしてまし 堂 世 子
春来ぬと鳴かはせともうくひすに先たつ鳥のあらはこそあらめ 游 清
雨後鶯 春雨のはれてのゝちそうくひすは梅の花かさきてを鳴なる 濱 臣
竹裡鶯 呉竹のうきよの中にうくひすのうれしきふしもかつこもりけり 定 時
春鶯喚客 松ならて野へにひかるゝ鶯のこゑには日をもかきさらさけり 千 幹

うへしこそ人はめてつれをりもをり春もやよひに咲るさくらを
 禁中桜 今宵しも衛士のたく火のおきあかしたれかみはしの花さくら花
 花契多春 よろす春千春百春かさせとも色香はあせぬ花さくらにはな
 聖堂の前なる桜を 幾春かみそなはしけんもろこしのよしの山にさかぬ桜を
 をれるさくらを 心なきすさひにはあらず山さくら折て市路にうるは誰子そ
 たれこめて風にしられぬ一えたは浮世の外さくらなるらむ
 道行人さくらの花をみて馬をとむ
 暮ぬとてすむる駒の鞭をさへとる手もたゆむ花の木のもと
 花 友 さくら花咲のさかりのまるとるにはもれし人をそいひつゝけゝる
 夜 花 桜花風やさそふともし火のまたゝくことに思ひこそやれ
 人木のもとに立てはるかなるさくらの花をみたる
 ねたきこと我波ならば遠かたの花のこかけに立よらましを
 待 花 写し糸の花をみてたに慰ん咲をまつまのこゝろいられに
 嶺にゐる雲たにあたになかぬや花待ほどのこゝろなるらむ
 咲花のこゝろにかゝる嶺の雲いくたひそれとはかられにけむ
 一年をさながら花になしはてゝ百代遊はむ花陰もかな
 花 はつ花はわれ先みむとしのひつゝおなし心に行あひにけり
 風静花盛 よしといひよし野の山によきほととの風も匂へる花さかり哉
 花の盛に上野にて日の入ころ
 しら雲に入かとみしは山からす花にねくらをしむる也けり
 花の盛に墨田川にて 夕潮ののほる汀のさくら花うちゝる波にならはさらなむ
 雨後花 雨はるゝ花の雫のひまなさに枝のこ蝶のはねもほしあへす
 花のもとに網ひく おり立てあことゝのふる浦人も花にこゝろはまつ引れけり
 河 花 舟よひてあすもわたらむ墨田川陰ゆく水も花になるころ
 みよしのゝ河そひくればさくら花岸のみさひに影を匂へる
 関路花 杉むらにまた夜をこめて逢坂の関は花より明そめにけり
 (歌なし)
 故郷花 道とへは高嶺の花をゆひさして昔をかたる奈良の里人
 雨後落花 春雨の名残や雪になりぬるとたとる計にちるさくらかな
 咲ほとはあたに日数をふる雨のはるれはとくもちるさくら哉
 行路散花 路うつむ計に枝はすきにけり花ふむ駒のあしおともせず
 花衣におつ 香をとめて袂にすかるこ蝶かとみえて散くる花さくらかな
 湖上落花 あしのほのみたるゝなしてあしの海に散や箱根の山さくら花

由豆流 光彪 濱清 躬絃 長亨 眞澄 幹之 景寛 定保
 河落花 吹風もかすむ外山の琴川ちる歟幾瀬の花のしら波
 借花 とゝまらぬ花とはしれと散ゆくをみてはしはしとかついはいれけり
 雉子 眞柴こそかりには来つれ春山のきゝすは何におとろきて鳴
 野遊 かけろふのもゆる春野にぬひるつみ早蕨をりて今日もくらさん
 汐干に 塩さるになりけらしなあさりする蟹の子どもの近よるみれば
 苗代 水こもりにけふる計の苗代や稲葉の雲のはしめならまし
 春田 賤かやは隣へたてもなかりけり苗代みつを中垣にして
 一筋の苗代水を千町田にかすみわけてもみするころかな
 雪解する山の雫にそほちつゝ霞をかへす春のあら小田
 花のいろの紫野ゆきしめ野ゆき春の遊ひに摘すみれかな
 八重山吹 春雨の七日ふれゝばひとへつゝ八重山吹はちりみたれけり
 折山吹 ひたすらに春をやらしと折つれは手ふさより散山吹の花
 瀧辺藤 山姫の春の手わざ歟瀧のいとによりあはせたる藤なみの花
 藤春 ふる雨を松のおほへるふちの花われぬれしとよりてこそみれ
 花のまを夢とは人のくりことゝ思ひなしてをしき春かな
 春春鐘 うちいそく心やいかに山寺のかねてもをしき春のわかれを
 三月尽 かくはかりなれしものを春よなどさらはとたにもいはてゆくらん
 春人事 のとかなる春にあふ身のさちなれや花みる外にするわざもなし
 春遠情 心あらん我にもあらて見しこともなにはの春を何したふらむ
 春河星 河水にうつるふ星をわすれては散うく梅の花かとそみる
 春雲 花とのみみねにかゝれる白雲はこゝろうきたつはしめ也けり
 春夜 春のよはねられさりけり月影のさし入窓に梅もちりつゝ
 春衣 うくひすと鳥はなけとも咲花の雫にぬるゝ衣手はよし
 春舟 舟人の真槌とる手もたゆむなり春はこゝろのなきわたりつゝ
 春杖 老ぬとて花みる人におくれしまけし心にきりし杖也
 春夢 ちるとみはとたえやせまし咲ころの花にかけたる夢の浮はし
 思ひねの枕に花の散としもみはてぬ夢そあやなかりける
 春獣 ふる雨のおとしつかなるおほる夜に水脉せきのほる春の川類
 春虫 おのか名の養きる虫もうくひすの笠ぬふ花に身をやすらむ

立綱 咲匂ふ花より花にうつりつゝ遊ぶこ蝶の宿もさためす

光彪 沼水杜若 むらさきに水をもそめてかきつはたさきぬの名をはたかへさりけり

立綱 燕 玉簾うこかす風にさそはれて軒端はなるゝつはくらめかな
山里にすみけるころやよひ計に人のとひけれは
柴の戸にしはしと人ととゞめおきて折にそのほる嶺のさわらひ

立綱 春紀路にゆく人をおくる
あくまでも君こそからめ春はまたたくひなくさの浦のみるめを

定治 故郷春 ふる郷の野をなつかしみ我来れはおなし心歎春も来にけり

游清 五百重波一卷終

定時 五百重波二卷 夏部
更衣 宮人はさくらかさねをぬきかへて山藍すりのをみ衣せり
花の香をしめし衣のあかなくにとき分て猶夏も来にけり

游清 新樹妨月 夏にいる弓張月の影みれば槻の若はえくまとなりけり
若かへて露にぬれけり

長亨 老の身もみるに心のわかかへるわかかへる手の露のすゝしさ

游清 新樹露 おひそはる椋の若葉やみかくらむおくしら露の玉とみゆるは

游清 隣卯花 うの花をう糸しあるしに物まうすませこしにみる事なとかめそ
吾かたにさらぬ月かとかひまめは庭しろたへに咲るうのはな

光彪 菴 佛 世々ふれとたえせさりけり御佛に瀧のそゝきし水のなかれは

正臣 待郭公 しのひねは更でもらすとほとゝきすあひなたのみに夜を重ねけり
をんなどもほとゝきすを待

定治 尋郭公 ほとゝきす待にねぬ夜の月影はもやのしとみに明残りけり

景寛 初郭公 うれしきは枕ならへてねし人もきかぬに聞る山ほとゝきす
道行人ほとゝきすを聞

真澄 山に郭公鳴 夏山のしけきかうへに立まよふ雲より高く鳴ほとゝきす

務廉 山彦のこたふるたひにほとゝきす友よひかはす声ときくらむ

躬紋 山家郭公 待わたる都はよそにならしはのかきねになるゝ山ほとゝきす

定良 聞郭公忘帰 ほとゝきすきは帰らんのあらましもまた二声と思ひなる哉

田鶴子 渡郭公 舟待てともと思ふをほとゝきすひとりつれなく鳴わたるかな

濱臣 野亭郭公 ほとゝきす今一声とやすらひて野守か宿に日をくらしけり
游清

光彪 雨中郭公 さみたれば賤か萱ふきつまくちてほとゝきすさへ声もらしけり
看経の間に郭公を聞といふ事を
ほとゝきす鳴一声に染紙ののりたかへたる我心かな

八穂 馬上聞郭公 郭公鳴すてゝゆく久方の雲はるかにかけれわか駒

游清 郭公稀 わすれてはまた初音かたととるまで山ほとゝきす声のともしき

与清 五月はかりに 過こしなあつれしめらひ草の庵は五月の日比むつかしくして

務廉 家に菖蒲ふくをみて 露かをるつまやの軒のあやめ草長きねさしもむつまじき哉

千枝子 雨中菖蒲 けふよりはつきてふるらし長きねのあやめにかゝる軒のさみたれ

光彪 河五月雨 すみた河いつ澄へくもみえぬかな濁りに濁るさみたれのころ

真澄 五月雨久 五月雨は軒の山栗花咲て実になるまでもはれぬ空哉

定良 梅雨 卯花をくたすとみしもけふはまたいろつく梅にふるなめかな

游清 梅雨久 青かりし梅の木の実の黄はむまて晴間もみえぬ五月雨の空

濱臣 ね 花のいろはゆはたとみえて青摺のうは裳にかよふ名さへなつかし

彦磨 薄暮水鶏 夕まくれまたきにたゞく水鶏かなさらても門は明やすき夜を

游清 夕からすねくちらもとむる比よりそくひなは門をたゞきそめける

長亨 水鶏驚夢 涼しさにはしぬなからのうたゞねをいさめかほにも鳴くひな哉

真澄 夏月 涼 夢は遊ふこ蝶の春なるをさます水鶏は夏の夜にして

光彪 夏月涼 秋つ羽の衣手とほす月影は身にしみてこそすゝしかりけれ

定良 夏月遅 蚊遣たく宵の烟にくもらしと影やいそかぬ夏のよの月

游清 水辺夏月 夏のよは月もあつさをいとへはや水の底には影しつむらむ

寛光 夜 川 かり火のうつろふ河のうかひ舟こかるゝいろに波もたつなり

立綱 野 蚩 行かへる野へにわらひのをり過てまたもゆるはほたる也けり

承綱 故郷蚩 吾妹子とはやくすみこしふる郷は思ひありけに飛ほたるかな
真澄 咲ぬへき枝は残してひとかたに所せけるあちさるの花
游清 けふみれはうす色にこそなりにけれきのふは白きあちさるの花
正臣 夏草葺水 夏深きすゝきかくれを行水のおとはかりこそ穂にいてにけれ
定治 水草隔舟 さし分て行かともみれはへたゞりぬみつのみまきの真孤かり舟
正臣 ゆり 秋さかは是も野のへの七くきに数まへられん姫ゆりの花
正毅 うき秋の霜にあはしときゆり花とこ夏にしも咲ましりけむ
千枝子 撫子勝衆花 たよりあらはもろこし人にみせはやな千草にまざるやまと撫子
堂勢子 夕 立 立つこととてとく過ぬらむ雲きはひ夕たつ雨の足をそらにて

野夕立 松陰にしはし人をはいこはせて足とく野路を過る夕立
夕立雲 山のはをいつといふまもな空に引わたしたる夕立の雲
時つまに日影も消てゆふ立の雲ひろこりぬむさしのゝ原
光 彪 游 清

蝉声夏深 おのか羽の名にはたかひしあつさをも鳴過したる蝉の声哉
雨後蝉 夕立にぬれたるおのか羽衣をかわかしかてら蝉や鳴らむ
光 彪 游 清

納 涼 風そよく葉ひろくたかしその隈にかくるゝほとは夏としもなし
松下納涼 夕立の晴てのゝちの月みんと我立ぬれぬ松のしづくに
光 彪 游 清

水辺納涼 河風に吹なかせし扇をもとぬはかり風そすゝしき
家々納涼 とりくゝに涼しきしめつ夕貌の草の花垣ならのした庵
定 治 真 澄

夏 河 涼しさのいかてこもれる夏衣袖つくはかりあさき河瀬に
立 綱 千 罔

夏 舟 暮行は月に棹さすすゝみ舟ひるは柳の陰をしめつゝ
与 清 長 英

夏 夜 おとろかす鳥もそらねと思ふまてはやくそ明る夏のよの空
短夜夢 木枕をさたむるほともなつの夢結ふとすれはあかつきの露
游 清 堂 勢 子

夏 枕 みしか夜はかひなかりけり引結ふあやめの枕長きねさしも
光 彪 游 清

夏 扇 ひねもすにならせとも猶あかぬ哉こやむつたまのあふきなるらむ
草の葉もよれぬるはかりあつき日は扇の風そいのちなりける
游 清 堂 勢 子

夏 獸 六月の照目をうしとあへきつゝよるさへ月の影やわふらむ
濱 臣 定 治

夏 馬 柳陰すゝしきしめてあけまきか水かか駒もこゝちよけなり
正 路 美 雅

夏 犬 今はとてあしひの花も散過ぬ駒なゝつみそ夏の山道
光 彪 堂 勢 子

夏 虫 いてこちこやよ翁丸なれをしも遊ひかたきに夕すゝみせむ
水ぬるむ澤田にすめるむしの名のひるまやいかにわひしかるらむ
堂 勢 子

五百重波二巻終
五百重波三巻 秋部
山への庵に秋の来る心を 枕ゆふ一夜はかりに露おきて深山の苔に秋をしる哉
寛 光 游 清

幽栖秋来 人はこす秋もよもやと思ひしに朝露白し庭のよもぎふ
務 廉 千 枝 子

田家早秋 おく露も所得かほに匂ふなりあかたの宿の秋のはつ風
七 夕 人言は千名の五百名に立なから逢夜ともしと星やわふらん
光 彪 立 綱

朝 顔 織女かみそぬふ針にぬくいとの長かれと思ふ夜は更にけり
小櫛とりねくたれ髪をゆふ児にもかけてやみまし朝貌の花
しめゆひし籬の竹のふしのまを千代とや思ふあさかほの花
光 彪 立 綱

秋野を分て 思ふかたおほけなるかな是かれにはひまつはるゝ朝かほの花
をみなへしなまめく野へに紐とける藤はかまこそうしろめたけれ
八 穂 游 清

秋 花 おなしいろのいつれかさきにくつろはん朝かほの花月草のはな
野 洲 良 游 清

秋 涼 秋風に残るあつさもなよ竹のふしよきほとに夜はなりにけり
露 しら露はさなから玉とみゆるかなきえすはとりて糸にぬかましを
定 良 堂 勢 子

虫啼草花 七くさの数はかりかは虫のねもかきかそふへき秋の野へかな
故郷虫 人すまて年ふる郷のきりくゝすつゝりさせとはたかために鳴
美 雅 堂 勢 子

稲 妻 夕月の入ぬる山の雲まより光をかへててらすいなつま
行路霧 霧深みわかゆる駒のいなゝきやおくれし人のたつきなるらむ
光 彪 堂 勢 子

初 鴈 待つけてうれしきものゝかひなきは我ためならぬ鴈の玉つさ
物ことうしてふ秋も初鴈の声聞けふはうれしかりけり
芳 香 堂 勢 子

山家初鴈 きゝつやとかりあはする人もなし軒はの山を過るかりかね
桂かち月のみふねにとるかも聞なされぬる鴈のこゑかな
定 治 游 清

月 前 鴈 花すゝきほに出てまねく比しもそかならす馬はつれて来にける
吾宿は市の中道しかはあれと更行月のよはのしつげき
游 清 千 枝 子

月 言にいてゝ月は人をもさそはねとみるに心のゆかぬ夜そなき
月のいる山の端なくはあこかるゝこゝろは身にもかへらざらまし
光 彪 堂 勢 子

月 澄はこゝろ澄けりしかはあれとこゝろ澄てそ月も澄ける
行水をよすかにまたん秋のよはおなし心に月もすむやと
務 廉 堂 勢 子

十四夜月いとあかりけれは
へたてゝも望の光におとらめや竹の葉月の一夜はかりは
承 良 堂 勢 子

名所月 山のはのよもにさはらぬむさし野は月のためにはやてなかるらん
武隈のふた木の松のこのまより月をはみきと人にかたらむ
定 良 堂 勢 子

江 月 月みればなにはのこともおもほえすほり江の水のこゝろ澄つゝ
棹させは波間に影をさそひ来て月のみふねにのるこゝろかな
游 清 堂 勢 子

舟 中 月 月影の塩くもりせぬ海なればこゝろはれども真槌とる也
湖上翫月 都にてあはれといひし月影はたゝよのつねのあはれなりけり
游 清 堂 勢 子

山 家 月 影もらぬかたもなきまで荒にけりはてはすみかを月にゆつらむ
荒屋月 つゝあつゝふり分髪をむかしみし秋にかはらぬ月の影かな
光 彪 堂 勢 子

井 月 月影は板の底にしつめともくめはひさこにかつ浮ひけり
閑居月 所せきむくらか露をわひしともおもはぬ月や宿となすらむ
游 清 堂 勢 子

月前管絃 月にゆくこゝろを糸竹にしらへあはせて遊ぶけふ哉

月前鐘 心をは月にかたりてねぬよはをねよとのかねよ何いそくらむ

月前篋 ぬにさはる山も波路の竹篋よすから月にのりてこそさせ

月前眺望 月のためうからぬほと浮雲によそほひたてし遠近の山

月前鷹 五百代の田面のすゑにみつゝ落る鷹さへ月にみえけり

樵夫婦月 花ならばをりやそへまし照月を嶺に残してかへる柴人

浄侶對月 世の塵にくもらぬ月を法のしはおなし心にあはれとやみる

深夜月 こほろきの声も澄ゆく秋風に月影更ぬよもきふの宿

欲入月 あかている月のこゝろはおもほえてさはる山へのうらめしきかな

陰夜月 影もらす雲間もかなとまもりゐて月なき夜はもねられざりけり

雨中秋月 雲間より月もやもと夜もすから雨にあらそふわかこゝろかな

鶉 山畑にいろつく粟のほろ／＼とちる秋風にうつら鳴なり

菊花始開 晴そむる雨夜のほしのこゝちしてみつよつふたつ咲るしら菊

菊花色々 くれなるもくちなしも匂ふませの内に高きこゝろのしら菊の花

風前掲衣 つちのおとをそれかとはかりさそひ来て軒はの松に風をやむなり

東西掲衣 おそくとく柳はそめし河岸のあなたこなたにころもうつ也

山家掲衣 夕つく日めにかけてゆく旅人をおくりむかへてころもうつなり

葛掛松 山深き松の戸ほそは小夜ころもうつにねさむる人たにもなし

紅葉 ひとつすらにつれなき名をはたてしとや松をいろとる葛のもみち葉

紅葉 かつるともみさりし松のこす多より色にいてたるつたのもみち葉

紅葉未遍 きふまでさをにみえしをみよしのゝみふねの山はこかれそめけり

紅葉浅 もみち葉に心はかりはこかるれとまた染はてぬ舟岡の山

紅葉浅深 あかなくに小舟よすれと岸のへの紅葉はさしてこかれざりけり

深山紅葉 りすくこくみゆる紅葉のはてまたおそくとくこそ散ははしめ

紅葉一樹 山彦のこたふる峯のもみち葉にまたくちなしの色もましれり

紅葉 露霜のかゝるめくみの一樹とて実さへあからむ柿のもみち葉

紅葉 焚すてし峯の照射の秋かけてこかるとみしは紅葉なりけり

紅葉遍 妻かめをほりする鹿の思ひよりこかれそめけむ嶺のもみち葉

紅葉遍 としといひおそしと誰かかこつへきなへて梢の紅葉しにけり

東西紅葉 秋山の錦をみればあかねさす日のたてぬきせいろこかりける

かへるての紅葉 みてのみはあかね心にかへるてを帰る手に折もてそゆく

ちの木の紅葉を

みとりなる児の手かしはをいろとりてうす紅葉する庭のちの木の

暮秋衣 行秋の名残とめつとみしものをうつろひにけり萩か花すり

暮秋風 ゆく秋の名残と聞はうしとのみ思ひもはてぬをきのうは風

秋のすゑ墨田川にて すみた河堤の草ねむし鳴て水の秋こそさひしかりけれ

秋のはて けふのみと秋をみはつる夕ぐれにいやはかなくもちるもみちかな

五百重波三巻終

五百重波四巻 冬部

山木枯 散はてし枝より枝にひゞきあひて夕暮すこき花のこからし

ちりつもる峯の落葉を吹きあけて替におろすこからしの風

夕 凧 夕ぐれは人めもかれし草の戸をさしてはあくるこからしの風

道行人しくれにあへり

あまたたひ道の長手をゆく人におくれ先たつむらしくれ哉

玉はこの道の行手のほとなきにおくりむかへてふるしくれかな

時雨陰晴 夜もすから落葉しくれを聞わくはうつりうつらぬ窓の月影

行路時雨 夕立にかくれなれたる椎かもとけふも時雨に笠やとりせり

落葉埋路 霜にそむ梢みにとてこしものをその落葉にそ路は絶ける

山落葉 見るか中にわたる時雨の雨はれて残る木葉そ山めぐりする

月前落葉 空高く夜はに木葉のふりくるは月のかつらにあらしもやふく

河に紅葉なかる 河波はいさといはねともみち葉のなかるゝかたにゆく心かな

庭 霜 もみち葉をとなせの波に吹ためてあらしにおくる河おろしかな

閑庭霜 物うさにはらはてみれば朝な／＼落葉か霜そ庭つくりする

冬 草 さら菊はくちしまゝなるませの中におきまとはさぬ霜の花哉

たねはまたこほれしまゝにおひ出て枯生の小草した緑なり

七くさの六くさはかれし霜のしたにくさ残る撫子の花

寒草纒残 撫子の残るすかたもあはれ也はゝそか原の霜かれのころ

谷寒草 北ふたく谷ふところの枯生には冬よりもゆる春のわか草

神無月の紅葉を 山姫の秋よりかけて神無月そめわたしたるはしのもみち葉

いる矢よりはやく過にし秋のいろを真ゆみ一木に残してそみる

冬曉月 よとゝもに絶ぬあらしのほとみえて木間あらはに在明の月

雲間寒月 こからの寒く吹夜は月さへもをり／＼雲のころも着にけり
 旅宿冬月 おもほえずすかの荒野にかりねしてひとり霜夜の月をみるかな
 冬 月 杉の屋にふるやあられの雲晴て玉をみかける月の影かな
 河 水 山河に氷のかけし板橋をこゝろとけてはえこそわたらね
 水駐舟 湊江は氷るにけり今朝みればむやはぬ舟も出かてにする
 千 鳥 菅こものとの浦わに友待としきしのひても鳴千鳥かな
 河上千鳥 すみた河々つらさゆる筑波嶺のねこしの風に千鳥鳴なり
 深夜千鳥 磯千鳥さやかに聞ゆ小夜更て蟹のよひ声しつまりしより
 水 鳥 わたつみの岩もとゆする夕波におとうちそへてたつあきさ哉
 草庵聞霰 おともなく萱か軒はをつたひ来て板戸をたゞく玉あられ哉
 山里の霰を 色もなきそとものみすし吹わくる風の霰や窓たゞくらむ
 旅宿冬夜 草枕ふしわひにけり有馬山るなのさゝはらさやく霜夜を
 初 雪 浅沓のかくるゝはかりふるまて初雪わくる雲のうへ人
 旅中初雪 今朝のまの霰そ雪になりけるつほめる花の咲こゝちして
 うき旅と思ふ心もきゆはかりおもしろくふるはつみゆき哉
 うちゝるもまた袖笠のはつみゆきちふりの神やぬさとみんかも
 山居初雪 山の名の都にちかきさかなれやはつ雪ふれは人またれけり
 橋上初雪 はつ花の心地のみするしら雪を枝に咲せし青柳のはし
 雪後朝 降つみし夜のまのみ雪とけにけり朝日こほるゝ軒の玉水
 舟中雪 よしの河中ゆく舟にみあくれば雪おもしろき妹とせの山
 蘆へゆく鷺よみの毛をわれにかせ舟さしかてら着つゝ雪みん
 名所雪 あすもまた有馬管笠きてをみむ雪おもしろきゐなのさゝ原
 田家雪 ふる雪のひとすち高くつもれるは行かひなれしあせの細道
 濱 雪 よる波のしらゝの濱はかきくらしみ雪ふる日の名にこそ有けれ
 海辺雪 すみのえの松のうれをもしら波のあらふとみしは雪にそ有ける
 野 雪 風にちる尾花の雪とみしほとに真しろになりぬむさしのゝ原
 岡 雪 よせかへる波かとみえて舟岡の松のあらしに雪そうちゝる
 小野山の雪を まれ／＼に横川にかよふ人影も雪に絶たる小野の山道
 閑居雪 身をかくす宿とは雪のしらねはやまはゆきまてに降つもるらむ
 雪中客来 たれならむ雪のした折ふみわけて養うち私ふ声聞ゆなり
 月雪にとはれしよりもひとすちの深きなきけそ雪にみえける
 とはるればはやつもりゆく雪の中に心とけてもかたるけふかな

游清 立綱 定治 游清 千園 游清 立綱 芳香 由豆流 光彪 游清 堂勢子 景寛 千枝子 野洲良 濱臣 堂勢子 千園 立綱 千引 務廉 堂勢子 游清 千枝子 游清 野洲良 濱臣 堂勢子 景寛 千枝子

雪中遊興 さかつきをとれば寒さも波のうへに心とけあふ雪のとも舟
 鷹 狩 踏たてし狩場のきゝすほろ／＼と羽かひの雪そちりみたれける
 夕鷹狩 ひとしきり霰をおろす夕風にす多たる鷹のまたきほふなり
 神 楽 神もさこそゝろ引らむはふりこかるとるや真弓のもとす多の声
 をりかへし遊ふ今宵の水草には神のこゝろをまつとりてまし
 中臣や中とりもちて舞ぬらん天つかなきのもとす多の声
 宮人か神の遊ひにとる鈴のみるともあかし長き夜すから
 佛 名 つみとかも消るわさとてさし油さしも雲るをかゝやかすらむ
 佛名おこなふ家 かへ梨の酒はあらねと法の師にこゝろはかりの綿はかつけん
 人のもとへ炭やるとて
 埋火のものこのこゝろをわすれすて思ひおこせよ山すみの身を
 冬 夢 雪深きこし路にかよふ夜はの夢かへるの山やねさめなるらむ
 早 梅 春またて紐とく梅のいちはやきみやひにまけぬ鷺もかな
 こゝろとく咲も匂ふ歎うめの花年もみ雪も深き垣ほに
 歳 暮 一年を何にくれぬとかそふれは筆とるわさの外なかりけり
 いたつらにこししも暮れぬきのふ／＼けふ／＼をのみ言くさにして
 をとつひよきのふよけふよあすよとて歳の終りにはや成にけり
 門ごとに歳の内よりしめ引てまつにそ春のいろはみえける
 河 歳暮 筏士も春をはこゝに松杉や年のくれとてつなく河くま
 舟中送年 とし波のゆくにまかする蟹小舟つな手に春はくるにやあるらむ
 閑居歳暮 世の人をおくりむかへぬすみかにも年はかへりて春は来ぬめり
 歳暮松 としふかきみ雪のしたにうつもれて子日をまつもあはれ也けり
 歳月をおくりむかふといそかねは松も我身のたくひなりけり
 五十四なりけるとしの暮に
 吾よはひ都へかよふ駅路のかすよりも猶すきとすきぬる
 追 雛 つかさ人なやらふ声もさ夜更てはや御湯殿に御湯すゝむ也
 年のつこもり けふことに人をふるして行としをうとみもはてす何をしむらむ
 大路ゆく人のおとなひしけかるは春待けふのこゝろいそき歎
 五百重波四巻終
 五百重波五巻 恋部
 恋のこゝろを
 人にとつつけし思ひのあやしきはかへりて身をもこかすなりけり

濱臣 光彪 游清 堂勢子 光彪 定治 彦丸 光彪 濱臣 堂勢子 野洲良 光彪 正毅 濱臣 游清 立綱 与清 堂勢子 濱臣 光彪 立綱 正毅 游清 光彪 立綱 正毅 游清 光彪 立綱

『五百重波』とその歌人

憑人妻恋 思ひをは人のつま木にかけ初てもゆるはおのかこゝろなりけり 寛光
不返事恋 かきやれとかきやるかひもなかりけり筆の思はんこともわすれて 千幹
不逢恋 壁におふる逢ことなしの草をしも我身につみて嘆くころ哉 光彪
若なつむ女といふことを 堂勢子

我思ひ野への若などもゆれともめにみえねはやつまむともせぬ 立綱
暮秋恋 いのれともかひなき恋のあやにくに神無月さへちかつきにけり 八穂
逢恋 親さくる妻とひよりてさしかはす妹かかひなややはら手枕 野洲良
及暁逢恋 つれなきにたへにしかひも在明の月影ながら袖かはしつゝ 定良
女のもとにて枕にかきつく

しるといへはさしもしるらしれりともしりきとなせにつけの木枕 光彪
しのひてたゞく 世にもれん名をつゝましみあらはには驚かさてそ驚かしぬる
恋の歌五首の中に 手枕に君かつけてしたわなればたけしとそおもふ朝ね髪をも与清
別恋 きぬくの別の床にした紐をゆふつけ鳥よこゝろしてなけ 濱臣
憑恋 行す糸をたのむもあやな梅といひ桜とうつる人のこゝろを 田鶴子
待空恋 月待と人にはいひしぬれ衣をわれこそ着つれ露の明ほの 寛光
待恋 しら真弓削るま鉦のかならずとたのめし人の今宵こしとや 游清
契不来恋 更行はむねの烟となりけり契りむなしき宵の空たき 千枝子
不憚人目恋 蟬のかるみるめも今はおもはれすこゝろをうけのしつめ難さに 立綱

互に常に聞恋 思ふこと時そとも(なく)まさくれはそなたにあはす笛竹の声 光彪
疑恋 いろみえぬ人のこゝろの花うるしぬるかたよそにありやしぬらむ 濱臣
よへとかへらぬ

かへらすはいらへたにせよいな舟ものほれはくたるならひある世に 定時
心かはりける人に 綱手ひくかひこそなけれ人こゝろよそになるをの浦の蟹舟 務廉
女の深き山に入んよしいひたるに

思ひいる山はさもこそ深からめあさきは人のこゝろなりけり 長亨
門さしていれざる恋

老らくに我をも人やたゞへけむなしとこたへて門させりけり 寛光
恋の心を ともすれはとりはなたれて袖ぬらす我うき中もさのゝ舟はし 千枝子
精進間恋 秋深きいもひの庭のした紅葉風吹ことに落ぬへきかな 寛光
ぬれきぬ いつはりにすくてふ糸のあれはこそ世のぬれきぬはぬひそめにけぬ 光彪
和詞恋 づらかりしきのふにかはる言の葉にかけとめらるゝ命とをしれ 光彪
寄郭公恋 ほとゝきす聞と心もゆかさりき汝を待ためのはしるならねは

寄橋恋 年月に恋わたれとも人は猶在しつらさのまゝの継はし 千引

寄石恋 中々に思ひこもれる石ならば打いてゝたに人にしられむ 千枝子

寄獣恋 牛の子にはしめてはくる鼻繩のくるしきものと恋はしりけり 千園

寄虫恋 一筋に思ひかくれとさゝかにのいとほるゝ身はかひなかりけり 定治

寄機恋 をとめ子かおるはた物のふみ木にもなりてしかな恋に死なすは 躬絃

寄衣恋 うれしさをつゝむ夜もなし唐衣袂ゆたかにたつ名のみして 堂勢子

寄糸恋 いつかかくいろに我身をそめ糸のむらこになれるこゝろなるらむ 濱臣

寄琴恋 まさくれは下樋にかよふ松風につれなき人のならはましかは 定時

寄燈恋 影とのみ身はやせにけりともし火の花こゝろなる人をこふとて 堂勢子

寄矢恋 思ひいるこゝろを人にしらせてむやつめかふらのなりもならずも 躬絃

寄物語名恋 うき中は遠きさかひもへたてぬをいつかは夢にみつゝの濱松 定時

思三人恋 花をとひ月をたつぬる外にまたゆきまほしきかたも有けり 濱臣

等思兩人 うとむへきかたこそなけれ月もし花もあはれとおもふ身なれば 光彪

等思七人恋 高さしに七ゆくをとめ七なからわれはやまかむその七をとめ 彦丸

恋東西人 おそくとくもえ出る岸の青柳にたくへる妹を恋るころかな 千幹

三夜へたてたる 待あかし恨明してはてはまたうきめみよとのこゝろなるらし 光彪

二度たゆる恋 中絶し人をふたみのうらつたひひろひしかひもまたあらぬ哉 定良

五百重波五巻終 いてさらはさきのならひに此度も思ひやかへす待こゝろみむ 游清

五百重波六巻 雑部

夜雨 軒の松まかきの竹にふる雨のおとを聞わく夜はのしつつけさ 定良

関路雨 ゆきゝをもとゝめぬ不破の関の戸をもるは板やの雨にやあるらむ 務廉

田家水 うけ樋して引や門田のいさら水かくてもたりぬ賤かすまひは 濱臣

水 世につるゝ人のこゝろの濁り水ひとり清とも誰かくみゝむ

閑中水声 とふ人にしはしまきれしやり水はかへしてのちそ音をましける

墨田川にて すみた河夕風たえて都鳥あさる瀬にのみ波はみえけり 千幹

名所里 年をへて瓜生の里にすみぬれとわか思ふことならずも有哉 定治

暁山 まふしす嶺のさつをかともしひに光をかはずあかほしの影 安寛

山 家 都人わかをる山のおくまてはこゝろをたにもおもひおこさし

山 家 燈 ともすれはなれ来る猿のたはわざにうちけたれぬる窓のともしひ

山 家 雲 よそめには雲にすむとや思ふらむ雲こそおのか山にすみぬれ

山 雲 到臥牀 岩ねふみかさなる山に我をればたよふ雲もまくらかみなり

山 中 瀧 うき世にはまたも引れぬ山すみのこゝろをつなく瀧のしら糸

山 路 眺 望 のほりたちかへりみすれは香具山の雫なりけり埴安の池

夜 山 路 明ぬる歎路のくまわに松の火のともしすてたる跡のみゆるは

山 路 旅 行 いく手向こえて木曾路の旅ねにはぬき袋さへむなしかりけり

旅 泊 夢 みるゆめもおのかさま／＼かはるとも千舟百舟はつる湊は

大 村 関 齋 か熱海の湯あみに行時

磯 間 よりわきていつなるはしりゆのやまひをさめに君はゆくと歎

此 たひは君もろとも立はしりゆかまくほしき草まくらなり

山 家 猷 都人いかにとはむさゝひの声を軒はに聞とこたへん

田 家 鳥 おのか名を人にしらせて田のくろをたつ／＼しくもあゆむ鳥哉

井 づるへ緒のたえて年経しまゝのぬに猶いにしへのくまれぬるかな

浦 島 子 ふる郷は家路もしらすなりにけりとこよの島に七日へしまに

源 氏 竟 宴 に弘徽殿女御を

ね たましと思ひのまゝにしつめても猶うらめしき須磨のうら波

お なしく小君を はかなしよたとればかくれたゆたへはいかてと人にせめらるゝ身は

忠 度 を 露を吹岡への風のはけしさにつひにかひなき身とそ成ぬる

那 須 与 市 を こゝを瀬と思ひいらすはやしまかた波にこえたる名をやたつへき

能 因 法 師 を 今も猶霞とゝもに立し名を世にとゝめたるしら河の関

琵琶 法師 を よつの緒にこゝろや深くこめつらむめにみることに引されすして

千 秋 万 歳 を 水駅とほき流れをつたへ来て今も三河の里にこそすめ

大 原 女 を 世中をわたるつま木のいとなみに今は我身もやせとほりけり

背 面 美 人 いかねはうしろ手はかりみし人をひたおもむきに慕ふなるらむ

商 客 その葉さへ枯せぬ市の立花にみのなりはひやたくへみるらむ

海 賊 舟人のよせくとつくるしら波のひゞきの灘はいかゝわたらむ

大 津 画 に 鬼の念仏したるかた

す かたこそかくはありけれみたたのむこゝろを鬼とたれかいふへき

猩 々 といふものゝ酒のみたはるゝかた

たゝひとりさめてかひなき世なりとてもろ心にや酔こたれけむ

翁 は新おひ姫はあらはひする山河に桃の実のなかくれたるかた

山 河 の 流 れ わたりに世をや経しもゝとせちかきおきなおむなは

い せ 物 語 の こゝろ を

水 の うへ に 数 か く ふみの あたからへは かなき ことも いひかはしけり

女 とも 山 寺 に まう て したる

は つ 瀬 山 今 朝 こ え 行 て か へ る さ は 宇 治 の 里 に や や と り と ら ら む

市 に 物 か ふ 車 あり う す れ ゆ く 市 路 に た て る 小 車 は 何 に こゝろ の れ る な ら む

鏡 う ち む か ふ 鏡 の 影 は 老 に け り 在 し な か ら の こゝろ な れ と も

筆 い か な れ は み し か き 筆 の 命 も て 千 代 に く ち せ ぬ 名 を と ゝ む ら ん

こゝろ なき筆にこゝろをはこはせて思ふ事をはかきかはしつゝ

朝 な ゆ ふ な 手 な ら ず 筆 の か く て さ へ 心 の まゝ に は し ら さ り け り

み あ れ の 露 う ち は ら ひ 梓 弓 い て の と ね り は 今 朝 そ 出 た つ

蹴 鞠 紫 の 雲 の 庭 の ま り 遊 ひ あ か れ る 御 代 の す さ ひ と そ み る

雙 六 つ れ づ と あ か ぬ す さ ひ に す こ ろ く の 市 場 の 馬 に の る 心 か な

い か り 舟 人 の 命 を か く る い か り つ な い か に 心 の 波 も さ わ か む

碁 さ ゝ れ 石 の 岩 は と な ら ん そ の こ を は 斧 の 柄 く た す 人 そ み る へ き

聞 村 笛 露 払 ふ 野 末 の 里 の や す ら ひ に 近 よ る 笛 や こ ち づ なる ら む

鶴 鶴 お も へ 人 に は く な ふ り の お こ な ひ を たゝ あ さ ら け に み や は と か め む

お り た ち て と つ き を し へ し 神 代 よ り 神 の 心 や と り は し め け ん

数 な ら ぬ 深 山 か ら す の や と り た に 高 き 梢 を あ ら そ へ る 世 歎

竹 林 に 鳩 鳴 あ し 引 の 山 鳩 来 鳴 竹 は や し 千 代 の さ か ゆ く 杖 に き り て ん

虎 さ て も 猶 あ ら ひ ゆ く や と と ら へ て 桜 さ く 野 に 飼 み て し か な

十 二 支 を よ め る 中 に 子 丑 寅 酉

き の ふ け ふ 巢 た つ 鼠 の 鳴 こ 多 は ちゝ や 恋 し き 母 や ゆ か し き

大 君 の 御 車 か け て ゆ く 時 は 牛 も く ら ゐ の あり け な る も ろ こ し の 船

虎 よ り も こ の 日 本 や お そ ろ し き 皮 も て わ た る も ろ こ し の 船

う ち ま き の よ ね ひ ろ ふ と て 庭 つ 鳥 か た み に こゝ と 呼 声 の よ さ

さ か し ら に 横 は し り ゆ く 河 蟹 の お れ あ し と も し ら す や 有 ら む

蟹 の ら 猫 も な つ き ね ふ り ぬ か ま と も る み つ わ の お ん な 膝 を ま か せ て

猫 の 哥 あ ま た よ み け る 中 に 蜂 蟻 蜘蛛 蓑 虫

我 に 似 よ と を し ふ る 親 の 言 の 葉 に す か る こゝろ の た の も し き か な

ち ひ ろ 有 る 堤 を く や す 折 も あり あ な か し こ し と い は さ ら め や は

あ ら は なる 軒 よ り 軒 へ く も の い を か く れ と こ ろ と お も ふ なる へ し

み の む し よ そ の 蓑 ぬ ぎ て 我 に か せ 世 の う き 時 に 着 つゝ か く れ ん

定 治

游 清

美 雅

立 綱

光 彪

濱 臣

由 豆 流

長 亨

游 清

定 治

游 清

濱 臣

彦 丸

立 綱

游 清

真 澄

寬 光

濱 臣

彦 丸

光 彪

彦 丸

正 臣

游 清

光 彪

彦 丸

彦 丸

彦 丸

彦 丸

彦 丸

彦 丸

彦 丸

彦 丸

彦 丸

彦 丸

心 ともすれはちゝにみたるゝ心かなふたつありとは思はぬものを
夢 何かその六にわかるゝ夢もあらむこゝろひとつにおもひさまさは
午 睡 草の葉の露のひるまを手枕に結ひかへたるうたゝねの夢
述 懐 浮草のしたゆくいをはえなくて世にひれふるも数ならぬかな
寄硯述懐 筆とれをしへし親の言の葉をなとて硯のうみわたりけむ
壯年述懐 年たけぬほとにと物をおもひたつこゝろのすゑをとほしてしかな
ひとり言 ふしの嶺をはちかさね山もかな心高きのなすらひにせむ
思ひをのふ 紫も朱もなにせむ墨染のあさのころものかるき身そよぎ
むくら 世にはまた出しとおもふ我門をうれしくとちしやへむくらかな
ちり 山となるかひこそなけれ数ならぬ言葉のちりはつもりあけても
古戦場 ものゝふのたけき心もつき弓のをれしやいかにくるしかりけむ
秋日過古戦場 鳴弭のおとはむかしと聞野へに面影みする旗すゝきかな
親鸞上人の旧迹なる三度栗を
おなしくさかさ竹を
ひとゝせにみたひ花咲わか栗は御法のたねを結ふなりけり
もとつ葉も末の根さしも竹むらのよをへてつきぬ法の道哉
游清ぬしのもよりしたゝみをおこせ給へる時
うれしともいはてやみなんかつきするあまの身なればしたゝみにけり
盃に橋とかきつはたを蒔絵にしたるに哥かきてと人のいひけれは
立花をさかなにとりてかきつはたへたてすのまむさかつきそこれ
さかつきは愁をはらふ玉はゝき手にとるこゝろによはひのふらし
酒をたへてたへ酔て 美酒に我酔にけりかしら酔ひ手ゑひ足ゑひ吾ゑひにけり
一日も此君なかるへからす
ほとゝきす月雪花のをりゝもなさけひとつははなれさりけり
物名まつひは 蘆の葉にまつあはれて飛ほたる思ひは深き江にやもゆらむ
ほたる をりかけの竹のまかきに柴のいほたる事をしる人そすむらし
なしたつめくるみ

寛光 寛光
濱臣 濱臣
真澄 真澄
寛光 寛光
定良 定良
与清 与清
濱臣 濱臣
游清 游清
光彪 光彪
立綱 立綱
千引 千引
正臣 正臣
由豆流 由豆流
游清 游清
濱臣 濱臣

社頭松 神さひしいかきの松に手なふれそたゝりありとてしめそへにけり
砌下有松 うつしうゑし松のした露かつこりて庭に玉しく栄えをもみむ
人の質に太刀を
つるき太刀腰にとりてはくますらをかへなん千歳そさやにみえける
人をはひて いつはりに千代万代となにかいはむたゝ百歳のよはひへよ君
寄神祝 かくはかりをさまざる御代も人こゝろ直ひの神のめくみとそしる
此ふみ書をへつるをり、歌数はいくら計かあらむとて、およひををりてみれば五百に
今すこしあまりたれば、とりあへず五百重波とは名付たるになむ
五百重波六卷終

作者三十五人姓名
濱臣 清水玄長
光彪 秋山庄兵衛
定時 森戸彦七
千幹 正木正輔
田都子 廣岡登妻
真澄 岡田徳一郎
正毅 猪飼院院太郎
千引 大石源太兵衛
定良 木村俊蔵
定治 森定治
與清 高田六郎左衛門
由豆流 岸本大隈
千園 一柳千園
長亨 東海林又右衛門
景寛 長尾仁左衛門
承 青木助吉
野洲良 関岡長右衛門
游清 本間游清

堂勢子 村田寿海娘
立綱 大寂菴
躬絃 安田一庵
寛光 片岡関輔
長英 馬場與兵衛
安寛 中村藤七
務廉 福田彦八郎
正臣 山本清濱
幹之 杉本善兵衛
彦曆 斎藤可怜
千枝子 真光寺後室
美雅 小島半七
正路 植村金平
定保 隅田随聞
貞仲 山田玄升
八穂 高井伊十郎
芳香 片岡勝之進

田鶴子
千園
游清
濱臣
光彪
立綱
千引
正臣
由豆流
游清
濱臣
作者三十五人姓名
濱臣
光彪
定時
千幹
田都子
真澄
正毅
千引
定良
定治
與清
由豆流
千園
長亨
景寛
承
野洲良
游清

堂勢子
立綱
躬絃
寛光
長英
安寛
務廉
正臣
幹之
彦曆
千枝子
美雅
正路
定保
貞仲
八穂
芳香

村田寿海娘
大寂菴
安田一庵
片岡関輔
馬場與兵衛
中村藤七
福田彦八郎
山本清濱
杉本善兵衛
斎藤可怜
真光寺後室
小島半七
植村金平
隅田随聞
山田玄升
高井伊十郎
片岡勝之進

関岡長右衛門
本間游清

本間游清

本間游清